

第三十五回エンドール国王杯争奪武術大会。

その本戦第一試合は 思いもよらぬ形で始まった！

組み合わせ抽選にも顔を出さなかった謎の選手、デスピサロが、Aブロック残り十五人との、一度での対戦を要求したのである！

一対十五のハンディキャップマッチ。

圧倒的不利と思われたデスピサロは、それを覆すどころか、悪魔のごとき強さで、対戦相手十五人中十四人までを惨殺。残る一人、マッシュロッド 破砕棍 マクダニエルも、右腕を切断され、這々の体で、戦闘台から逃げ出す。

「私が貴様を殺さぬのではない。貴様に、私に殺される資格がないのだ」

そう言い残し、デスピサロは戦闘台から消えた。

右腕からの出血が元で、生命の危機に陥るマクダニエル。彼の生還を諦めるエンドール王オーギュスト。

しかし、王と一緒にいたブライには、「勝算」があった。

アリーナとクリフトが、選手控え室に残っていたのである。

「うまくすれば あの者、助ける事が出来るやも知れませぬぞ」

★

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

第12話 「神の御旨、人の業」

あさづけ兄貴

戦闘^{リッング}台に続く、選手控え室の出口。
その向こうが、にわかに騒がしくなった。

「！ 何？」

アリーナが、とっさに反応する。
彼女だけでなく、部屋にいた全ての者が、その出口の扉を凝視する。

向こうから、扉に向かい、急速に近づく足音。
そして、それが止むと同時に、扉が開く。

入ってきたのは、担架に乗せられた男。
そして、担架を持つ二人の兵士。
わずかに遅れて、オーギュスト王とブライ。

「怪我人！」

それを見たクリフトが、小脇に鞆——先ほど、アリーナの頬に貼った絆創膏が入っていた、あの鞆だ——を抱え、担架に駆け寄る。
自分が何をすべきか、瞬時に彼は理解したのである。

担架の上に横たわる男には、右腕が無かった。
鋭利な刃物で切られたように、滑らかな切断面から、血があふれ出ていた。

蒼白な顔面。
呼吸が、荒くなっている。

クリフトが、鞆を床に置き、男の ^{マッシュロッド} 破碎棍 マクダニエルの左手首に、人差し指から薬指までの三本をあてがい、動脈の拍動を確かめる。
(脈はそれほど弱まっていない　これなら！)

「クリフト」

ブライが、クリフトのそばに歩み寄る。

「助かりそうか」

「出来るだけの事はします」

クリフトが、間を置かず答える。

動いているのは、口だけではない。マクダニエルの体中を触れ、怪我や出血がないかどうかを確認する。

「なるほど　ここには、アリーナ姫の付き添いで、クリフト殿がいたのであったな」
納得するエンドール王。

ブライはエンドール王に、マクダニエルをここに運ぶよう進言したのだ。そうすれば、
彼が助かるかも知れない、と。

それは、この目の前の若き神官こそが、それを成し遂げられる人物である事を、そして
そのこと自体がアリーナの「勘」という形での予知である事を、ブライは知っていたから
である。

「でもクリフト、出来るだけの事、って　ここ、呪文が使えないのよ？」
アリーナが、心配そうに言う。

確かに、クリフトは他人の傷を癒す事が出来る。しかし、それは、ホイミ　つまり呪
文の力ではなかったか。

だが、クリフトは答えた。

「生きとし生けるものの命を救う事は神官の務め、そして神の御旨　それをいかなる状
況下においても行う事が出来るよう、我々は常に訓練を積んでいるのです」

こうして――

奇蹟は始まった！

＊

鞆を開き、中の物を取り出す。

先ほどの、絆創膏を作った布と糊料。

幾重にも折りたたんだ、透き通った紙のような物。

透き通った小瓶に入った液体。特徴的なデザインで一目で分かる。聖水だ。

太い紐の端に、光る金属の針のような物が付いた　そんな、得体の知れない物体。

先ほどの絆創膏のとは別の、折りたたんだ白い布。

先が広く板状になった、大小二つの挿子。

それに、鋏。

これらは、一体？

「担架を床に置いてください。ゆっくりと」

兵士たちは、クリフトの言葉に従った。

クリフトも、そのそばにしゃがみ込む。

「まずは、姫様にお手伝いいただきます」

「私？」

「ちょっと、お手を拝借」

クリフトは、突然の指名に戸惑うアリーナの手をさっと取ると、切断されたマクダニエルの腕の上　脇の下のあたりに、その手を持って行った。

「ちょ、ちょっと！」

さすがに驚きの声を上げるアリーナだが、クリフトは表情を変えず、言う。

「そのあたりに、脈拍を感じる部分があるはずです。そこを強く押さえていただきた
いのです」

「脈　　拍？」

言われてみると　確かに、脇の下に、規則正しく脈打っている部分があるのが分かる。

「うん。ここが脈打ってるみたい」

「そこを、腕の骨に向かって、ぐっと押して下さい。その拍動を、姫様の指と骨とで挟むように」

「　　こう？」

ぐっ。

ちょうど親指が拍動に当たるように、腕を鷲づかみにしたアリーナが、その手に力を込める。

すると

「血が　止まった　？」

周囲で見ていた他の選手から、どよめきが漏れる。

確かに、マクダニエルの右腕から勢いよく流れ出ていた血の量が、ちよろちよろと、極度に少なくなっていた。

「その拍動が^{アハゼルシュラガデル}腋窩動脈　それを押さえつけて、末梢の血流を止めているのです」

果たして、その言葉の意味を理解できた者が、その場にどれだけいるだろうか。

この世界で、怪我や病気を治療するのは教会の神父や神官の務め。

それゆえ、彼らは人体の構造、機能、そして怪我や病気を治療するための（呪文を含む）方法について、一通りの知識を持っていた。

しかし、その高度な知識を、教会は、門外不出のものとしていた。

人間の血管には動脈と静脈の二種類あり、動脈は心臓から各組織へ、静脈は逆に各組織から心臓へ、それぞれ血液を運ぶ。これほど簡単な知識ですら、神官以外でこれを知るものはほとんどいなかったと言っていい。

よって、出血点よりも中枢側の動脈を押さえ、止血するこの技術もまた、ほとんど世に普及していなかったのである。

＊

「そして、申し訳ありませんが　皆さんにもお手伝いをお願いしたいのです」

軽く、周囲の選手たちを見回しながら、クリフトが言う。

「どなたか、水を汲んできてください。多ければ多いほどいい　あと、強いお酒も」

「お酒？　って、こんな時に　」

「私が飲むわけじゃありませんよ、姫様」

マクダニエルの止血を手伝いながら、不満そうな顔で言うアリーナに、ほんの少し苦笑混じりに、クリフトが答えた。

「傷を呪文で治せる時はいいんですが、そうでない時、お酒で洗っておくと、傷が化膿しないんです」

「そういうこった」

声とともに、クリフトたちの目の前に、透明な瓶が差し出された。

「良かったら、こいつを使ってくん。安もんの粕取り^{マール}酒だが、強さは天下一品だ」

そう言って笑う、大柄な男。

名も知らぬ、出場選手の一人だ。

「ありがとうございます。後ほど、買ってお返しします」

「いやいや、いいってことよ」

クリフトの礼に、男は、照れくさそうに両手を振った。

「困った時はお互い様ってな」

「へえ、お酒で洗う、ね　」

そういった知識は、アリーナには無かった。いつもクリフトの呪文で傷を治してもらっ

ていたからである。

が、傭兵や冒険者など、単独での行動が多く、かつ負傷の絶えない職業に就いている者の間では、教会にたどり着くまでの応急処置として、このことは——無論、その本質が、酒に含まれるエチルアルコールの殺菌作用であることは知られてはいなかったが——常識となっていた。

もちろん、この選手も、飲むためではなく、傷の消毒のために、酒瓶を持ち歩いていたのである。

「じゃあ、ひとつ走り、水汲みに行ってくるわ」

選手は、走ってその場を去った。

クリフトはさっそく、酒瓶の栓を抜き、中身を右腕の断端にかけた。

「ぐうっ　　！」

意識を失ったままのマクダニエルが、痛そうなうめき声を上げる。

それと同時に、じわっとまた、傷口から流れ出す赤い血。

アルコールの血管拡張作用で、少しではあるが、傷口の血管が開いたのだ。

「クリフト　　」

「大丈夫です。姫様はそのまま」

不安げな視線のアリーナを励まし、クリフトは続けた。

「もうひとつ。このお城には、王室付きの神父様がいらしたはずですよ。呼んできて下さいませんか」

サントハイム城にクリフトが常駐しているように、このエンドールにも、王室付きの神父が常駐していたはずであった。

「ああ、じゃあ俺が　　」

「いや、待て」

威厳のある声が、神父を呼びに行こうと席を立ちかけた男の足を止めた。

「余が行こう」

「お、王様　　？」

「陛下！」

選手たちの、そして兵士の声が上がる。

「今、彼は恐らく、天に召された選手たちを弔っている最中だろう。おいそれと止めるわけには行かぬ」

「天に 召された？」

その一言が、暗雲となり、控え室に立ちこめる。

「 先ほどの試合、十五人が一挙に、デスピサロ選手と戦った。その十五人のうち、生きて戦闘^{リョウグ}台を降りる事が出来たのは、そこに寝ているマクダニエル選手だけだ」
悲壮な表情で、王が言う。

「 ブライ？」

その言葉をにわかには信じられず、アリーナは、信頼する家臣に水を向けた。

「恐れながら姫様、オーギュスト陛下の言葉は真実でございますじゃ」

ブライは答えると、沈んだ目をして、続けた。

「凄惨な試合であり申した 実に凄惨な」

「 デス ピサロ 」

アリーナの心の中に、怒りとも悲しみと、そして恐怖とも付かぬ感情が、ふつふつと湧いてくる。

「クリフト殿 その選手を決して死なせてはならぬ。あの男と戦い、唯一生き残った男だ。決して、決して死なせるでないぞ！」

「わかりました。神父様には『サントハイムの神官が救命処置を行っている』と、お伝え下さい」

改めて、クリフトの瞳が、熱意に燃える。

「あい分かった。皆も、クリフト殿に協力を。 大会の主催者として、このオーギュストが頼む」

王の呼びかけに、その場にいた選手が皆、うなずいた。

ブライをして「狸」と言わしめた、オーギュストの演技力と、それによる人心把握力。それを、オーギュストは遺憾なく発揮したのだ。

「頼んだぞ」

そう言い残して、オーギュストは部屋を出た。

そして、彼と入れ替わりに

「すまねえ。待たせたな」

入ってきたのは、大きな手桶を二つ両手に下げた男。

先ほど、酒瓶をクリフトに渡した男。彼が、闘技場^{コロシウム}内の井戸から、水を汲んで来たので

ある。

「足りなきゃ、また汲んで来るぜ」

「ありがとうございます」

答えながら、クリフトは、先ほど鞆から出した、折りたたんだ紙のようなものを広げてゆく。

いや、紙にしては、やけに表面がてかてかした光沢を放っているが

「クリフト、これは？」

「油をしみこませた紙を折りました。広げれば桶の代わりになります」

確かに、クリフトが紙を広げ、縁を立てていくと

それは、桶と呼ぶにはやや平べったい、どちらかというと「大きな、蓋のない箱」と呼ぶのがふさわしい、そういう物体になった。

内側にぐるっと、一定量の目盛りのように、黒い線が一本引かれている。

その「紙桶」の中に、傍らの瓶の中の液体を注ぎ入れる。

「それは 聖水？」

「そうです。神の力を宿した水 この水に、彼が失った血液の代わりにしてもらいます」

クリフトが、力強く言うと、立ち上がった。

手近な椅子を持ってくると、マクダニエルを挟んで向こう側に置き、その上に先ほどの紙桶を置く。

わずかとはいえ水の入った紙桶は、しかし油が水を弾き、形も崩れることなく、椅子の上に安置された。

「水をこちらへ」

言うと、再び切断された右腕のそばに座り込む。

「お、おう」

水を汲んできた男が、桶を、椅子の傍らにいったん置く。

「この中に、水を注ぎ足しゃいいのか？」

「はい、内側の黒い線まで 申し訳ありませんが、くれぐれも、正確にお願いします」

「 この線だな」

男は、水桶を手にとると、少しずつ、紙の桶に水を注ぎ始めた。

「姫様 手は大丈夫ですか？」

「えっ？」

いきなり自分に話を振られ、少し焦るアリーナ。

確かに、アリーナの右手は、かなりの時間、マクダニエルの動脈を押さ続けていた。普通であれば、かなり手に疲れがあるはずである。しかし

「大丈夫よ」

自信満々な顔で、アリーナは言った。

相変わらず、腕の断端から漏れ出る血はわずかである。それは、確かに、アリーナの力が弱まっていない証拠であった。

「きつくなって来たら、無理せずおっしゃって下さい」

「うん。本当に大丈夫だから」

短いやりとりではあったが、アリーナは、クリフトの自分への気遣いに、胸が熱くなるのを感じていた。

「あと、もう一人 エンドール教会に行って、どなたかに迎えに来てもらって下さい」

先ほどアリーナに作った絆創膏と同じものを作りながら、クリフトが言う。

「我々が運ぶのでは いけないのか？」

担架を持っていた兵士のひとりが尋ねた。

「運んでいる最中にも、いろいろとやらなければならない事があります。専門的な知識を持つ者が必要です」

「わかった。エンドール教会には私が行こう」

「お願いします」

兵士は、走って部屋から出て行った。

「よーし、ちょうど黒い線の所まで入ったぜ」

ちょうどその時、水を桶に入れていた男が、声を上げた。

「ありがとうございます」

クリフトは礼をすると、絆創膏と、先ほど鞆から出した、端に針の付いた革紐を持ち、立ち上がった。

マクダニエルの反対側、紙桶を置いた椅子の横に回り込む。

紙桶の中身を確認する。

「この水は、濃すぎれば神の力に身体が負けてしまう。かといって薄すぎてもいけない。本当に正確です。ありがとうございます」

言いながら、クリフトは革紐を完全に水の中に沈める。

「言われたとおりにやっただけだ。礼には及ばねえさ って、そいつぁ何だい？」

革紐の両端から 正確には、片端と、もう片端の針の先から、泡が出ている。

「こいつぁ ただの紐じゃねえな。空気が出てる 中が管になってるのか？」

「ええ」

クリフトが言う。しかし、男の方は見ていない。

彼が見ているのは、マクダニエルの左腕　その前腕だ。

鍛えられた筋肉の表面に、血管が浮き出ている。

「ここだな　」

言うと、マクダニエルの隣に膝を立て、先ほどの酒を、その血管の上に少々かけ、のばす。

立ち上がり、自分の手にも酒を少量。

紙桶の水の中から、先ほどの紐の、針の付いた方をつまみ上げると、それを持ったまま、再び座り込む。

針先から、サイフォン効果で、薄めた聖水が勢いよく噴出する！

左手で、マクダニエルの上腕をぐっとつかむ。

先ほどの血管が、更に強く浮き出てきた。

「この管を通して、聖水を血管の中へ直接送り込む！」

言うが早いか、血管に針を突き刺す！

「これが、聖水から神の力を取り込む、もっとも迅速な方法なのです」

周囲から、どよめきが起こる。

「水を　血管の中に？」

「そんなの、見た事も聞いた事もないぞ！」

「おいおい　大丈夫なのかよ」

水を汲んできた男も、心配そうに尋ねる。

「大丈夫ですよ」

針を差し込んだ部位を、絆創膏で固定しながら、いとも簡単に、クリフトは言う。

「貴方が本当に正確に、聖水を薄めて下さいましたから。大丈夫です」

★

一体、この選手は、何を作ったのか？

一体、クリフトは何をしたのか？

マクダニエルの身体からは、大量の血液が失われていた。

このまま血液が失われ続ければ、急激な血圧の低下を来し、そのまま生命活動を停止してしまう。いわゆる「^{ハイポヴォレミック}循環血液量減少性ショック」と呼ばれる状態だ。

その状態を脱するためには、血液を急速に補充するしかない。

この世界では、かつて（はるかな昔だ）、そう考えられていた。そして、教会において、実際にそう言った治療が試みられた時期があった。

結論から言って、そのこと自体は正しく、現在我々が住むこの世界でも、多量の出血に対する治療の第一選択は「輸血」である。

だが、この世界では　その試みの成果は、思わしいものではなかった。
「輸血」を受けた者のうちの多くが、程なく死んでしまったのである。

それは、「血液型の不適合」による血液凝固が引き起こした現象。

この世界では、いまだ「血液型」というものの存在は発見されていなかった　そのため悲劇であったのだ。

血液を直接補充したのでは、人間は助からない、と、教会は考えた。

ならば、何か血液に変わる、安全なものを補充すれば

そう考え、教会は、考え、試し、そして長い年月と幾多の人命の犠牲の上に、ひとつの結論に達したのだ。

聖水を「ある一定の割合」に薄めたものであれば、ごく一時的にはあるが、減少した血液の代わりをする事が出来る、と　。

聖水とは、特別に祝福した「塩」を、水に溶かしたものだ。

すなわち、宗教的意味は別として、化学的には単なる食塩水に過ぎない。

そして、その「一定の割合」とは、食塩の濃度にして、0.9%。

この濃度の食塩水は、我々人間の細胞外液と同じ浸透圧を持つ食塩水　すなわち「生理食塩水」と呼ばれるものののだ。

この濃度であれば、体内に注入しても、血球を破壊する事はないのである。

これより薄いと、浸透圧差で水が血球内に入り込み、破壊してしまう。逆にこれより濃いと、血球内の水分を吸い取ってしまう事になる。

もちろん、教会とて、この辺のメカニズムを完全に理解しているわけではない。
濃過ぎると、クリフトの言ったとおり「神の力に人間の身体が負けてしまう」。薄すぎると逆に「力が足りない」。
そう、教会では考え、教えているのである。

★

（さすがは教会、千年の叡智　　というやつか）
クリフトの邪魔にならぬよう、マクダニエルからやや離れたところに立っているブライが、ひとり思った。

（が　たとえ知識はあったとて、このような状況で動揺せず、あくまで冷静に事を進める事が出来ねば、それは生かされまい）

マクダニエルの血管に刺さった針の向きを微調整し、水の流量を調節するクリフト。
その手には、その瞳には、まったく迷いがない。

（やはり姫様の勘は正しかった　　他の誰でもなく、クリフトがここにおらねばならぬという、その勘は）

★

何はともあれ、これで、マクダニエルの身体は、最悪の事態　　^{ハイボヴォレミック}循環血液量減少性ショックには、陥らずに済む。

だが、クリフトには、もうひとつ、やらねばならぬ事があった。

アリーナが動脈を押さえて食い止めているとはいえ、右腕の断端からは、いまだに出血が止まらないのである。いくら聖水を補充したところで、出血を止めなくては、体内の血液量を回復させる事は出来ない。

「止血」。それこそが、クリフトに科せられた、次の使命であった。

「姫様、手の方は　　」

また切断された右腕の方に戻りながら、クリフトがアリーナに声をかける。

「さすがに、少しキツいかな」

それでも、微笑を浮かべながら、アリーナは言う。

マクダニエルの残った右上腕をつかむアリーナの手が、細かく震えている。
かなり、無理がかかっているようだ。

「申し訳ありません。急ぎましょう」

クリフトは、今度は、折りたたんだ白い布を手に取り、広げた。
その布の中には

「クリフト、それ　　！」

アリーナが驚くのも無理はない。

その布の内側には、釣り針のような湾曲した金属の「針」が、まるで魚の鱗のように、
無数に刺さっていたのである。

それぞれの針の穴には、あらかじめ、細い糸が通してあった。

「鍛冶屋に特注した ^{クルンムナードル} 湾曲針 です。これで切れた血管を縫いすぼめ、出血を止めます」

クリフトは、右手に大きな、そして左手に小さな ^{ピンセット} 摂子 を持つと、布から針をすっと抜き出した。

「姫様、少しだけ、手の力を緩めていただけますか」

「え？ いいけど、それじゃ血が　　」

「構いません。少しだけ、力を」

「うん。分かった」

クリフトの言う通り、アリーナが手の力をわずかに緩める。

途端に。

傷口から、血が湧き出した！

「吹き出す」ほどの強さではない。しかし、今までの「じわじわとしみ出す」感じではなく、明らかに「こんこんと湧き出す」ような出血である。

思わず、クリフトの顔を見るアリーナ。

しかし、クリフトに動揺はない。

「よし　出血点確認」

ぼそっというと、クリフトの両手が動いた！

針を腕の断端に差し込み、押す。

針は、自らのカーブに従い、円形の軌道を描いて進み、また断端の表面に出てくる。

それを何度か繰り返す。

ひと縫いごとに、そこからの出血が弱くなっていった。

糸が十分短くなったところで、鉋で針から糸を切り離す。

切り離れた端ともう片方の端とを、しっかり結び合わせる。

針を元の布に突き刺し、新しい針と糸をまたつまみ上げる　　。

ものすごいスピードで、傷口に露出する血管を縫い締め、出血を止めてゆくクリフト！

まさに、鬼気迫る、という表現がぴったり来る、クリフトの真剣な目。

いつも柔和なクリフトが、こんな表情をするなんて

「すごい　　」

アリーナも、その手際に見とれる。

既に、半分程度の血管は縫いすばめられ、止血された。

このまま行けば、マクダニエルは間違いなく助かる。

そう、アリーナも、周りで見ていた選手たちも、信じかけていた――

そんな時、突如、異変が起こった。

★

「!?」

突如、アリーナの顔が険しくなる。

「どうしました？」

「脈が　　弱くなってる！」

「なんですって！」

マクダニエルの身体の上から、その左手首に手を伸ばし、脈を触れる。

「本当だ　　まずい」

紙桶の中の水量を確かめる。

残りは、半分程度。

水は、マクダニエルの体内に、順調に流れ込んでいるようだ。

と、いうことは

(^{ヘルツ}心臓の働き自体が、落ちている　？)

確かに、循環血液量の減少による直接のショック状態は、急速輸液により、脱する事が出来た。

しかし今まさに、マクダニエルの身体に、「第二の危機」が迫っていたのである。

生理食塩水により、薄まった血液。

体組織に酸素を運ぶ能力の弱まったこの血液をもって、通常の代謝を維持するためには、短時間に多くの血液を運ぶ必要がある。

そのために、最も負担を強いられる臓器　それが血液のポンプ、すなわち心臓である。

マクダニエルの心臓は、急速に薄まりゆく血液を、懸命に体中に運んだ。

しかし、その頑張りも、ここに来て、限界に来ていたのである。

「頑張って下さい！」

傷を縫う手を止めず、クリフトが叫ぶ！

「貴方は必ず助かります！ だから、もう少し！ もう少しだけ、頑張って下さい！」

「そうよ！ クリフトだってこんなに頑張ってるんだから、貴方だって頑張renaさい！」

アリーナも、励ましを送る。　少々的外れではあったが。

だが、その叫びが、部屋の中で固唾を吞んで様子を見守る、他の選手たちの心に火をつけた。

「そ、そうだ、頑張れ！」

「頑張るんだ！ 神官殿が助けてくれるぞ！」

ウオオオオ！

その声が、うなりとなって、マクダニエルを呑み込む。

「姫様　脈は？」

「落ち着いたみたい　だけど、元には戻ってないわ。低いまま」

アリーナの報告を聞き、クリフトはつらそうな顔で、考え込んだ。

(打つ手がない　このままでは、出血が止まっても、心臓が限界を突破する　)

額の汗を、手でぬぐう。

(神よ　我が願いを聞き入れて下さるならば　彼の命をお助け下さい　！)

その願いは、聞き入れられた！

＊

部屋の入り口に、またも、どたどたと、大きな足音が響いてきたのだ。
そして、扉を乱暴に開け、入ってきたのは　　！

「神官殿！」

クリフトの僧服によく似た、しかし濃い青の装束に身を包んだ男であった。
黒い髪を、クリフト同様、耳の高さで切り揃えている。
目には、黒縁の眼鏡。
両手に、大きな袋を下げている。

明らかに、神父の服装である。

神父は、クリフトのそばに走り寄った。

「エンドール聖教会王室付き、ジョーゼフと申します　状況は？」

「聖水が入りました。止血は三分の二程度済みました　ですが、脈が落ち始めています」

「心不全か　」

言う、ジョーゼフと名乗ったその神父は、手に提げていた大袋の中から、革袋をひとつ取り出した。

その口からは、先ほどクリフトが腕の血管に指したのと同じ、針の付いた革の管が伸びている。

否、厳密には同じではない。

革の管が、二叉に分かれていた。

正確に言えば、二本の管を途中で一本にまとめ合わせ、その先端に針が付いたような構造をしていたのである。

二叉のうち、一方は革袋へ。もう一方は紐で結わえ、口を閉じてあった。

それを持ち、逆側に回ると、クリフトが針を刺した血管よりさらに近位　肘の血管を突き刺す。

「聖水です。これで輸液のスピードは倍　そして」

ジョーゼフは、懐から小さな瓶を取り出した。

透明な瓶の中には、やはり透明な液体と、そして、その中に浸かった一輪の花。

この花は

「マイグレックヒエン
鈴蘭？」

そう。鈴蘭の花を根ごと水に漬けた物　それが、この瓶の中身であった。

それを見た途端、クリフトの表情がほころんだ。

「こんなに貴重な物を　使わせて頂けるのですか？」

「こういう時に使わないで、どうします」

微笑みながら、ジョーゼフは言う。

「それに、これの扱いはひどく難しい。誰にでも使いこなせる物ではありません　貴方
なら、大丈夫でしょう」

そう言って、クリフトに、小瓶を手渡す。

比較的若くは見えるが、恐らくは自分より年齢も経験も上であるはずの神父が、自分に
この小瓶を託した意味を、一瞬にして理解した。

この神父は、彼自身の能力よりも、^{クリフト}自分を信頼してくれているのだと　！

「ありがたく　使わせて頂きます！」

力強く言うと、クリフトは、ジョーゼフが持ってきた革袋の管の、二又の一方を止めて
いた紐を解き、その口に、鈴蘭の漬かっていた水を、少しずつ、少しずつ　細心の注意
を払って、注ぎ始めた。

だが、その時。

周りで見ている選手たちのうち、ひとりが、声を上げる。

「鈴蘭って　それ、毒じゃねえか！」

「毒？」「毒だって？」

部屋の中が、一気にざわめいた。

「静かに！」

それを一喝して鎮めたのは、ジョーゼフだった。

「貴方には、^{アドヴェンチャー}冒険者としての旅の経験がありますね？」

最初に声を上げた選手に、訊ねる。

「お、おう　よく分かったな」

「確かに、旅の途中で、薬草や毒草を見分ける事は重要です。そして、そういう場面では、
確かにこの花の成分は毒となります」

「じゃ、じゃあ！」

「　　ですが」

ジョーゼフはあくまで落ち着いて、話を進める。

「この人のように、極度に心臓が弱った人には、この花の成分は、心臓の働きを強める薬として働くのです」

ジョーゼフの言う通りであった。

さきほどの「薄めた聖水」と同じく、教会が蓄え伝えてきた膨大な知識のひとつ。

それが、この「鈴蘭」であった。

ジョーゼフの言った「普通の人間には毒に、そして心臓が弱った人にとっては薬になる成分」。

それは「コンバトキシン」という強心配糖体の一種である事が、今日、我々の世界では知られている。そして実際に、鈴蘭の根のエキスが、旧ソビエトで、民間療法薬として使われていたのだ。

ただし、コンバトキシンは、薬理作用を発生する濃度と毒性を発揮する濃度が極めて近い。すなわち、心臓が弱った人に対しても、ちょっとした匙加減の狂いで、簡単に毒になってしまうのだ。

ジョーゼフも、そしてクリフトも、当然、それを知っていた。

そして、だからこそ、クリフトは、細心の中にも細心の注意を払って、あの瓶の中身を管に注いだのである。

★

程なく。

「クリフト！ 脈が強くなってきたわ！」

アリーナが叫ぶ！

「効いてきたんだ　『鈴蘭』が！」

クリフトも、ジョーゼフも、表情に安堵を浮かべた。

さっそく、傷口の止血作業に戻るクリフト。

先ほどと同じく、驚くべき速度で、傷の縫合を進めている。

ジョーゼフは、左腕の針の刺入部の角度を調節したり、聖水の入った紙桶や革袋をチェックしたりと、輸液管理に全力を挙げている。

そして、そこに、最後の援軍が到着した！

「まったく、国の主を置き去りにするとは　　」

入ってきたのは、エンドール王オーギュストであった。

もちろん、ジョーゼフが、迎えに来た王をうっちゃって、一人でこの部屋に帰ってきた事を指してそう言っているのだが、内容に反して、口調はまったく怒っていない。

今回がそれほどの非常事態である事を、彼も熟知していたからだ。

「ただ、おかげで、彼らを案内する事が出来たのだから」

そう言って、彼の後ろに立っていた人々を、部屋の中に招き入れる。

それは、エンドールの教会へ、迎えを呼びに行った兵士。

そして、まだ若い、三人の僧服の男であった。

一人は、誰も乗っていない担架を、小脇に抱えて。

もう一人は、両手に大きな鞆を提げて。

もう一人は、手ぶらで。

それぞれ、兵士の後をついて行く。

「エンドール聖教会本部の者です。連絡があった重傷者は　　こちらですか」

「はい」

僧の一人に、クリフトが答える。

「マクダニエルさんと言います。傷は右腕の完全切断のみ。薄めた聖水を体内に　　それと『鈴蘭』を使いました」

重要な情報を簡潔に説明するクリフト。

「これは　　すごい」

マクダニエルの状態を確認した、若い僧の一人が言う。

「完全に止血が成されている　　脈もしっかりしている」

「ここまで見事な応急処置は、見た事がない　　完璧です」

言うと、二人でマクダニエルの身体を担ぎ上げ、自分たちの持ってきた担架に移す。

残りの一人は、鞆から、ジョーゼフが持ってきたような革袋を出し、紙桶に入っていた管を、そちらにつなぎ換える。

「こちらの革袋と針管テューブは、一度お預かりします。後ほど取りにいらしていただけると助か

ります」

「分かりました。後ほど使いをやりましょう」

クリフトでなく、ジョーゼフが答える。

「それでは、我々はこれで」

「後はお任せ下さい」

「神の御名において、必ずや彼は助かる事でしょう」

「よろしくお願いします　あなた方に神の恵みを。^{ア-メン}叶いませ」

「^{ア-メン}叶いませ」

最後は三人声を合わせ、いかにも神職らしい挨拶をした後
僧たちはマクダニエルを乗せた担架を持ち、部屋を出て行った。

＊

「どうやら、僕の言った通りになったようすな、陛下」

「ああ、そうだな　ブライ殿には感謝せねばなるまい」

言いながら、内心、オーギュストは、舌を巻いていた。

この緑色の僧服の若者の持つ知識と勇気、冷静な判断力。

数多くの神父や僧を見てきたオーギュストでも、かつて、この若さでこれほどの資質を持つ者は見た事がなかったのである。

そして、それを信頼し、この大役を任せた、この老人の洞察力。

これもまた、侮りがたい。

（さすがは「凍嵐の魔人」　サントハイム王の懐刀は伊達ではない、ということか　。
あるいは、この者ならば　）

オーギュストは、覚悟を決めた顔で、言った。

「ブライ殿。この後、余の部屋に来られぬか？　そなたの知恵を借りたい」

「知恵、とな」

思わぬ誘いに、ブライの脳が、唸りを上げて回転する。

（この狸、今度は何を考えておるのか　まあ、大体想像は付くがの）

「このような年寄りの知恵で良ければ、いくらでも」

何食わぬ顔で答える。

「すまぬ。では早速　アリーナ姫、少々ブライ殿を借りるぞ」

「どうぞどうぞ」

澄まし顔で、アリーナが答える。

「できればしばらく借りっ放しでいて頂けると、私もののびのび出来てありがたいんですが」

「　　そのような憎まれ口を叩くような方にお育てした覚えはございませんぞ」

「ブライの口の悪さが伝染ったのよ。ベーだ」

顔をしかめ、舌を出す。そしてその後、真顔で言う。

「早く　　帰ってきてね」

ブライの顔が、緩んだ。

「しばらく借りっ放しでいて欲しい」といった直後に「早く帰ってきてね」。

矛盾した言葉の、どちらがアリーナの真意か、ブライには手に取るように理解できたからである。

「御意に」

それだけ答え、ブライは、オーギュスト王とともに、部屋を出て行った。

＊

どさっ！

その音は、アリーナの背後から聞こえてきた。

「！？」

振り返ると

クリフトが、壁を背に、へたり込んでいた。

「クリフトっ！」

思わず駆け寄るアリーナ！

「大丈夫っ？」

「ふう　大丈夫です。慣れない事をやったんで、ちょっと疲れが出ちゃいました」

クリフトが、壁際にへたり込んだまま、照れ笑いを浮かべ、頭をぼりぼりと掻く。

今までの緊張が、一気に解けたのであろう。

いつもの、優しく、ほんのちょっと頼りない、クリフトの笑顔。

「　　んもう」

腰に手を当て、ちょっとふくれてみせる。

「あんまり心配掛けないでよね」

「すみません」

謝るクリフトに ふくれっ面ではなく、優しい瞳で、アリーナは言った。

「 なーんちゃって」

「？」

「私、分かってるよ。傷を押さえてる間、ずっと、クリフトを見てたから」

「姫様 ？」

あの鬼気迫る、真剣な顔が、アリーナの脳裏に蘇る。

「クリフトのあんな顔、見た事無かったから なんか、すごく 」

少し潤んだ瞳で、アリーナは言った。

「カッコよかったよ、クリフト」

そうって、微笑む。

パチパチパチ

どこからともなく、拍手が聞こえてきた。

「あんたは凄え。凄えよ。人をひとり、助けちゃった」

拍手と声の主は、最初にクリフトに酒瓶を手渡した男であった。

「いいえ、私の力ではありません。教会の知恵と、神の御力^{おんちから} それに、貴方のお酒も。姫様にも、ジョーゼフ神父様にも、本当に皆さんに助けて頂いた そのおかげです」

「まーたまた、なに謙遜してるんだよ」

まじめに答えたクリフトに、男が再び言う。

「あんたがいなけりゃ、あいつは助からなかった。そいつは間違いない」

「そうですよ」

話に割って入ったのは、エンドール王室付き神父・ジョーゼフである。

「もし、あの場に最初にいたのが貴方でなく私だったら、果たして彼は持ち直していたかどうか あなたほどの確に『鈴蘭』を使いこなせていたかどうか、分かりません」

眼鏡の奥の、柔和な眼差しそのままの口調で、言う。

「確かに、それは神の御旨、そして教会の知恵だったかも知れません。ですが、それを正しく彼にもたらしたのは、まぎれもない、あなたですよ。神官殿」

「神父様 」

拍手が、一段と大きくなった。

酒をくれた男と、ジョーゼフだけではない。

部屋にいた全ての選手が、クリフトに拍手を送っていた。

数多くの死者が出た中、それでもなお貴重な、ひとつの命を救った若者に、限りない賞賛と尊敬を込めて

拍手は、しばらく鳴りやまなかった。

(つづく)

< 次回予告 >

大惨事となった武術大会。暴虐とさえ言えるほどの、デスピサロの強さ　　。

果たして、この大会は続けられるべきか、それとも中止されるべきか？

父親として、国王として、伝統ある大会の主催者として。

エンドール王オーギュストの選択や如何に！

そして、エンドール教会本部では、九死に一生を得た男が、目覚めようとしていた　　。

「不屈の^{ハイネス}主女殿下」第 13 話　「惨劇ののちに」

未曾有の事態に、人々の思惑は踊り、ぶつかり合う　　！
